

繻子の先駆者

永井喜七

繻子の需要は明治になって、にわか増加し始めたが、そのほとんどは「南京繻子」とよばれる外国製品の輸入によっていた。しかしその原料となる絹糸は、わが国から輸出されていたから、国家経済の見地からはのぞましいものとはいえなかつた。

明治初期になって洋式染織技術を導入した西陣においては、染色、機織ともにその技術水準は成熟せず、外国製品に負けない品質の繻子を国産することは不可能であつた。

そうしたなかであつて、南京繻子の輸入を苦が苦がしく思い、繻子の国産をめざした人物がいる。西陣曼陀羅町に住んでいた永井喜七である。彼は舎密局の伝習生として洋式染法の研究から始めた。五枚繻子の組織を八枚繻子に改めるなど苦心のすえ、明治七年、艶出ロールによる整理加工を思いつき、南京繻子の模造



写真は明治新宮殿に使用された繻子珍裂

に成功した。しかし工業生産の見地からはまだ満足すべきものではなく、さらに研究を重ね、明治十一年ついに、ロール運転に五馬力の蒸気機関を導入するとともに「ハジキ框」を使用することを思いついた。これにより彼の繻子製法は完成した。「ハジキ框」は明治五年「バツタン」としてリヨンからもたらされたもので、明治九年に長谷川政七が国産化に成功していた。西南戦争の軍用小倉織地に使用されるなど、西陣でも明治十年の後半から木綿織物中心にひろく使用されるようになっていた。

このようにリヨンから導入された製織技術の成熟と、舎密局などによる洋式染色技術の発達により、永井喜七の新しい繻子製織法は完成されたとみることができるといえる。

とはいっても南京繻子を駆逐するためにはまだまだその製織法では不足であつた。外国製品と肩をならべる品質の繻子の完成という水準にはほど遠いものであつた。完全に南京繻子を凌駕するまでに、その後およそ十年要したが、西陣の繻子産業の先駆者として、永井喜七の業績は評価されるべきである。

(福本武久)